

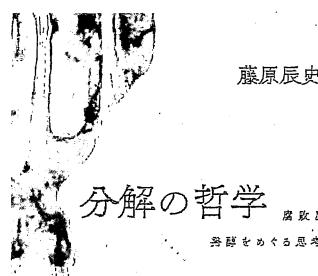
本書を読み終えて真っ先に思い起されたのは、「歴史の屑拾い」を自任した哲学者ベンヤミンの「だが、ボロ、屑—それらの目録を作るのではなく、ただ唯一可能なやり方でそれに正当な位置を与えるのだ。つまり、そのやり方とはそれらを用いることだ」という断章である。

著者は食と農の思想史を専門とする研究者だが、農業史を基盤に科学知と人文知を自在に往還しつつ、既存の人間観よりには自然観を鮮やかに転倒する。

本書を貫くキーワードは「分解」、すなわち「動植物の遺体、排出物、人工的産物などの有機物が微生物の作用によってより簡単な化合物に変ること」(『生態学辞典』)である。この分解の働きがなければ生態系、地球上の生命体を軸とする物質循環は成り立たない。命について腐敗・分解・

分解の哲学

藤原 辰史著



(青土社・2400円)
ふじはら・たつし
76年専
生まれ。京都大准教授。専
門は農業史、食の思想史。
著書に『トラクターの世界
史』『給食の歴史』など。

『評』東北大学名誉教授
野家 啓一

物質循環断つた現代に警鐘

崩壊は当たり前の現象であり、「人間は死ねば個体として分解され、土に還る」のである。ところが人間社会は「落穂拾い、肩拾い、修理屋、廃品回収、牛馬の死体の処理、ごみ収集」など分解と再利用の担い手を日陰者扱いし、社会的にタブー視さえしてしまった。その結果「コンクリート、プラスチック、化学繊維……化学洗

剤、使用済み核燃料など」土に還らない物質が大量生産・大量消費・大量廃棄されるにいたった。いわゆる環境問題とは、物質循環の回路を断ち切り、「腐敗機能を弱体化させてきた」帰結にほかならない。プラスチックごみによる深刻な海洋汚染は、その象徴とも言つべき事態である。

以上のよつてな課題を前に、著者は「人間社会によって滓なり糞なり廻なりと名づけられる」ものこそ地下の分解世界を支える要石だといつて厳然たる事実に気づかされるという仕掛けである。

「哲学と自然科学と生態学を結びつける」ところ企図は、本書において分解の博物学(自然史)となつて表現されたと言つてよい。

読
書